【資料紹介】

橡実庵一枝編『ひの川集』

――手錢記念館所蔵俳諧資料（一六）――

伊藤善隆
（立正大学）

摘　要

出雲市大社町の手錢記念館に伝来する俳諧資料の中から、『ひの川集』（橡実庵一枝編、春之舎千海序、近江屋利助刊）を翻刻紹介する。

キーワード：俳諧、橡実庵一枝、春之舎千海、近江屋利助、手錢記念館

はじめに

『ひの川集』は、橡実庵一枝によって安政五年（一八五八）に刊行された撰集である。一枝の詳しい経歴は未詳ながら、春之舎千海の序文には斐伊川の畔に庵を結んでいたといい、本文では「木次」の所付け（肩書き）を付して入集している。

一枝には、他に『翁くさ集』（半紙本一冊、安政七年刊）の編がある。これは半時庵淡々の百回忌追善集である。

『ひの川集』と『翁くさ集』とを比較すると、共通して入集する俳人が複数確認できることに気付く。たとえば、『翁くさ集』（個人蔵本を参照した）の七丁裏から九丁裏には「出雲」の俳人三十四名が入集するが、そのうち、千海など二十四名が『ひの川集』にも入集する。また、どちらも八千房肖年が、巻軸近くに入集している。

淡々の追善集を刊行し、肖年の句を載せているということは、一枝は八千房系の俳人であったと推定することができよう。本書の巻末（「卅」丁表以下）に入集する桃年以下の顔ぶれも、（鼎左は奇淵門だが）概ね八千房の門人たちである。

なお、「Ｗｅｂ版　東郷町誌」は、一枝が安政三年二月に建てた「物いへば唇寒しあきの風」の芭蕉句碑が、西向寺（鳥取県東伯郡湯梨浜

町大字松崎）の本堂前に残ることを紹介する（https://www.yurihama.jp/town_history2/default.htm　令和三年九月二十五日確認）。

本書に序文を寄せた春之舎千海（寛政九年〈一七九七〉～明治二十年〈一八八七〉）は、社家田中家の人。幼名は数馬、後に清年。俳号は、はじめ春之舎安海、安政三年に改号して千海と称した。千家俊信に国学、香川景樹に歌道、日々庵浦安に俳諧を学び、古川凡和（文化十三年〈一八一六〉～明治十年）、加藤梅年（文化十三年〈一八一六〉～明治二十年）、中臣典膳（享和四年〈一八〇四〉～文久三年〈一八六三〉）と共に、八雲俳壇四宗匠の一人に数えられる。

本書は、橡実庵一枝の資料としてのみならず、安政期の中国地方の俳人たちの交流の様相を知る上でも重要な撰集である。ここに翻刻紹介する所以である。

〈書誌〉

書型……半紙本一冊。二二、五cm×一六、七cm。袋綴じ。楮紙。
表紙……青緑色地小菊模様艶出し。原表紙。
題簽……原題簽。中央単辺。「ひ乃川集」。
序文……「春之舎千海［印］」。
内題……「簸川集」。
版式……無辺無界毎半葉五行（序）、無辺無界毎半葉八行（本文）。
字高……一三、六cm（本文四行目「松竹の～花井」を計測）。
奥書……「戊午のとし」（安政五年）。
刊記……「蕉門御摺物所／御注文次第出来差上可申候／京四條寺町東へ入御旅町／湖雲堂近江屋利助」（裏表紙見返し）。
丁数……全三二丁（序文一丁、本文三一丁）。

〈凡例〉

翻刻にあたり、句読点、濁点、半濁点を適宜補い、改行を適宜改めた。また、異体字は通行の字体に、片仮名は平仮名に適宜改めたが、原本の字体を残した箇所もある。

作者名の位置（高さ）は原本にしたがい、肩書きの位置は適宜改めた。なお、肩書きの国名の略称（「雲」「伯」など）の後には、原本にしたがい空角を補った（原本では空角を補っていない箇所もあるが、翻刻では全て空角を補った）。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに　」をつけ、（　）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

参考のため、原本の図版を末尾に示した。

〈翻刻〉

ひの川集　」（表紙題簽）

（白紙）　」（表紙見返し）

源鳥髪山よりながれて、伯耆と出雲とおなじ名によぶなる、こゝの簸川のほとりに、草枕むすばれける一枝雅兄、そのわたりの風吟をつどへて、ひの川集となづけられたり。」（序オ）さるは古事をたづね、はた川の名の両国ひとしきがごとく、境へだてず、交りふかくせむの心たねゞ〳〵は、これをくまざらむ。

春之舎千海［印］　」（序ウ）

籔川集

春之部

橡実庵一枝編

松竹の濡葉かゞやく初日哉　雲上ノ郷　花井
しのび啼するや雨夜の猫の妻　〃　汀月
浪よけの杭なまぐさき汐干哉　〃　楓月
明渡る雲のきれ間やはつ鴉　〃　自正
どちらから見ても真向の柳かな　〃　友山
朝雨に日和居りて花の雲　〃　蘭水　」（「一」オ）
海山の品も数あり恵方棚　西日登リ　花光
懸鍬に庵の正月過にけり　木次　蝶二
玉せりに人声あまる社内かな　〃　晴山
雨ひと日ひよりひと日や梅の花　〃　梅且
觜太も来て啼花のさかり哉　〃　休遊
裏道やどちら向ても梅のはな　〃　暁花
降さうでふらぬ日和や桃の花　〃　花中　」（「一」ウ）
成りかはる人の心やけさの春　法師田　春暁
鶯の啼や客待山の家　〃　龍山
降中に香のある春の草木哉　〃　光林
ちらかつた米粒嬉し蔵開　ヒエハラ　古笠
かしこげに見ゆる木ぶりや初桜　〃　甲乙
行過し袖に匂ふや闇の梅　案田　錦鶴
雨の降ばかりに見ゆる柳哉　畑　前路
菜の花や日南あそびの心よさ　〃　三追　」（「二」オ）
松風も長閑に吹て梅の花　大津　昭陽
漏る月に花の香の添ふ嵐哉　〃　花井
草笛に添て持けり花菫　大社　鳳口
花雪吹して静なり夜の山　〃　金桃
咲花に追るゝかして夜の滝　〃　蕉圃
首玉もおのれはづして猫の恋　〃　千海
あみかけた接木ためらふ鴉哉　〃　有鞆
鶯のはり合ふ声やうら表　〃　有柳　」（「二」ウ）
椿手に提て見てゐる柳かな　伯久見　桃下
御降や梅が香うつる青畳　小鹿谷　孤朗
毎日に嬉しき中の初日哉　松崎　故楽
けぶり立山のくぼみや残る雪　〃　月峯
汲あげた水のまくなき霞哉　ウノ　三津雄
春の雨横に降ても静なり　車尾　公羽
朝風に吹渡りけり門かざり　米子　北池
まだ打ぬ水田もあるに帰る厂　石トリコヱ　鶯和　」（「三」オ）
古い事いうて新し花の春　（虫損）　鵞川
乗懸の上にしなへるわらび哉　〃　池田　慎斎
近道に圃通してうめの花　〃　和年
白魚や夜のうつくしき膳廻り　シツマ　一痴
心せく羽ぶりも見えずかへる鳫　〃　竹雨
藪ぎはや思ひもよらぬ遅桜　〃　少年　松花
半分は葉につゝまれて遅ざくら　〃　少年　若水
草の戸や直に初日を膝の上　〃　柳雨
豆人の網引声やはるの雨　タル、　窓山　」（「三」ウ）
明る戸の音にまじるやはつ鴉　〃　其水

なつかしと見かへす山の霞哉　天河内　霞浦　澄きるは水の常なり蓮の花　休遊
人上し船の掃除や朝霞　上ムラ　松園　奥深う見ゆる草家の牡丹哉　暁花
田一枚ふさぐや梅の朝日かげ　〃　よね女　根は靄につゝみし山や郭公　蘭意
かるう吹柳の上や日和雲　ユノツ　雀州　明やすき夜のあまりや田の曇　亀友
蔓草のつるにつもりぬ春の雪　アサリ　青池　水音に谺の添ふや閑子鳥　花光
元日も暮て気の附寒かな　ウヤ川　可笑　」（「四」オ）　時鳥啼や小雨のはれ小口　花井
蝶飛や草の上風晴るそら　ハマタ　石茶　靄深き杉の奥なりほとゝぎす　汀月
風呂敷を敷て侘しき雛哉　近江彦根　笑山　滝よりも上に靄ある若葉哉　楓月
風に明て切戸のうちや月と梅　京　有節　灯を取たむし逃迷ふ行燈哉　友山
見所を習うて来る柳かな　〃　芹舎　涼しさや水にゆらるゝ山の月　蘭水
宵やみの都へ入りぬ花戻り　〃　霞川　月の出てちらかる雲や不如帰　春暁
一所野にも垣して梅の花　〃　鳥岳　こぼれては浪となりけり鵜の筏　龍山
女男の松並ぶや千代の門かざり　大坂　蟻兄　旭に花の向替つたる牡丹哉　光林
かすむ野へすゝむや藪を立雀　〃　松隣　」（「四」ウ）　咄し人を上座にすゑて涼かな　錦鶴
如才なく広がる東風の田水哉　〃　素屋　　三瓶なる姫沢の池にて
福藁や庵は神代の住居ぶり　〃　鼎左　牛の子の覗て居るや乙鳥花　前路
初花に指折旅の日数かな　鶴江女　ことし竹ばかり戦ぐや竹の中　下ノ庄　霞梢
朝靄にしつぽりぬるゝ柳哉　一枝　加茂川の灯を花にして涼かな　大社　鵞川
　夏之部　切売も壱歩くづさず初松魚　〃　梅生
時鳥啼や見上る杉の奥　雲木次　寿松　踏で見て渡る橋あり苔の花　〃　集甫
若竹のまた伸さうなけしき哉　〃　其外　気色ある門の往来や更衣　伯米子　鶴棲
日参のこれも恵みかほとゝぎす　〃　一枝　」（「五」オ）　朝冷や土用はなるゝ海の音　〃　一玉　」（「六」ウ）
不如帰啼や静に夜の明る　〃　梅園　ほめたれば抜て見せけり菖蒲太刀　〃　喜風
神棚に雫のつたふ粽かな　〃　虎逸　雲陰にさゞ浪つくる青田かな　〃　一笑
山水の音しづかさや啼水鶏　梅且　明てある空や若葉に月の色　〃　雀杖

鶯のすり餌仕舞て袷哉　山田　兎月
汐の香にそれで砂這ふ蛍哉　石仁万　青牛
葉桜のすさびや蜘の巣も造る　シホタ　青々
空を手に握つて待やほとゝきす　ハマタ　国井
若竹やちいさいほどが面白き　、　少糀
仰向ば嵐も寒き清水哉　、　少年　得一
草の香も添うて流るゝ清水哉　石茶
気扱ひせぬを馳走よ一夜ずし　一痴
ひとりづゝ来てふさぎけり涼台　青牛
時鳥啼や檜原のそよぐ時　鶯和
降過て入梅の重さの眼に見ゆる　トリコエ　鵞川
はりつよき鶯聞や四月山　因　鳥取　呑河
泥なぶりすなとて着せる袷かな　作　ツヤマ　夢人
ぬれ簑を懸た柱や蝸牛　一枝

秋之部

白雲の居りて萩のさかり哉　雲　西日ノホリ　松齢
我宿を旅にして聞きぬた哉　花光
稲妻に御先〳〵のひかり哉　木次　春波
登る日に露しぐるゝや竹林　、　梅牛
朝空や焚火の見ゆる野の小家　、　太乙
鶏頭や露もつて居る朝の色　、　梅逸
文月や物なつかしき夜の空　蝶二
月くらき藪の陰なりきり〳〵す　梅且
音もせず流も見えず天の川　休遊
冬近きちから見えけり雲と水　暁花

鳫啼や気の落付ぬ旅の空　下阿宮　梅園
ちりさうで起しもやらず雨の萩　雪松
蕣や怠り見せぬ花のつや　上ノ郷　折言
白浜の一際白しけふの月　、　常盤
茹豆のかげんこのむや月の宿　、　文賀
明月やまだ闇深き海のはて　花井
夕月を待て庭はく残暑哉　汀月
新米に賑ふ里のけぶりかな　楓月
朝寒や汐ひく跡の砂光り　自正
出て見れば三ヶ月白し柿紅葉　友山
淋しさや小雨降夜を鹿の声　蘭水
今見よと雲も退けり山の月　春暁
まつくりと峯に立けり月の鹿　竜山
明月や更て河原に人の声　光林
掃除して袖をぬらすや萩の露　錦鶴
十六宵や隣歩行も闇の間　今市　左得
更行やをり〳〵遠き鹿の声　前路
夜嵐につかれも見えず女郎花　重羽
こぼるゝは露のちからのあまり哉　大社　、　対美
伸過てゆかむもやさし葉鶏頭　、　梅年
蕣やまだとゝのはぬ空明り　、　吾春
しろ〳〵と流るゝ水や啼鶉　、　夏木
眼覚れば砧も近き船場哉　、　松人
老松のけはひになるや蔦もみぢ　、　さの子
青瓜や七夕過てひとさかり　蕉圃

古川は篠もまじりて萩の声　中津　蘭和
ほそる灯に声のふとるやきりぐ〜す　母里　一圓　」（「十」オ）
芋畑に雨のとゞかぬ残暑かな　井シリ　鳳吹
登る月向ふに受て門きぬた　無比
口かるき雀の声や秋のそら　石　大モリ　完甫
脛長き鳥やけそ〳〵露しぐれ　〃　〃　巌韵
余所稼する子戻りて盆の月　〃　宗寿
月しばし松をはなるゝ嵐かな　〃　昇山
秋風に崩れてたつや山鴉　大田　一團
山川の音がはる夜や秋の雨　〃　露芳　」（「十」ウ）
鹿笛のものに答て夜更けり　〃　陶工
窓を洩るる日あししたふや秋の蝿　タクノ少年　桐陰
五歩十歩つひに汀に月見かな　淡津　一桃
咲かけてちらぬ日はなし萩の花　カウツ　花兄
来る秋の光りなりけり椿の葉　ハマタ　虎嘯
初鳫の急うとばかり見えにけり　日貫　片石
明月やあまり静な峯の松　シツマ　梅旭
雲に鳥秋も長閑に見られけり　一痴　」（「十一」オ）
草原やはてなき空を秋の風　石茶
雨の月うつろふものや油石　虎嘯

高角人麿の社前

神さびし松の葉音や月の秋　可笑

訪市隠

まはれとて菊のまがきの巧哉　青池
牛市のはては露置河原哉　鶯和

草原や風の間に見る秋の蝶　トリコヱ　鵞川　」（「十一」ウ）
むしの音を潜る谷間の往来哉　尾　ナコヤ　而后
按广にも得意のありてけふの月　近江栗津　帆道
はれくもるたびにかはるや虫の声　大津　省甫
傘かりたあたりなりけり遠碕　播　加古川　蒼山
蘭の香やもたれ心のよき机　サコシ　烏雪
立秋や心養ふ水の音　赤穂　吟雪
つくぐ〜と黙り合ふたる月見哉　淡　スモト　塘雨
雲霧の香をてりすます紅葉哉　江戸　等載
並松や三日月ひとつ右ひだり　京　」（「十二」オ）
やどるより居所になじむ月夜哉　雲水　梅通
明月や秋にひと夜の明やすき　〃　可大
豆蔦もきつと見らるゝ紅葉哉　〃　岱一
松はよし寐入しさまや虫の声　〃　春湖
しばらくは露もみどりや稲の浪　〃　丈云
樫の葉をわけて灯をつる踊哉　〃　薫道
朝〳〵は風もつのらず草の露　〃　芦十
捨植の菊も匂ふや雨あがり　〃　兆二
降中に山の明かし秋の雨　〃　」（「十二」ウ）
明暮に水の気の立花野哉　〃　弄化
市に見て野山なつかし女郎花　〃　有斐
白露や今明る夜の八重むぐら　大坂　洗羽
置ものによる大小や露の玉　〃　公眠
吹ほどは吹て露けし山の萩　〃　鶯宿

東福寺にて

〃　可兆
〃　蓁々
」（「十三」オ）

松深う入て見まさる紅葉哉　、　肖年
寐て迄も眼先にそよぐ芒かな　一枝

冬之部

あり〳〵と月夜の中を時雨けり　重羽
積上た年木にせまき戸口哉　蕉圃
火になして花をしのぶやつゝじ炭　梅生
俵物に横座せばめてほた火哉　千海
水鳥の羽音聞ゆる日ぐれ哉　前路
つもるほど積て月夜や雪の上　三追
汐先や別に明るき夜の雪　花井
凩や夜明る際の谷の音　汀月
殖て鳴千鳥に浦の夜明哉　楓月
雲洩るゝ月のとゞくや冬木立　友山
むつまじき隣同士や年わすれ　蘭水
煤払や焚急ぎする風呂の下　文賀
水汲の行もけしきや雪の朝　春暁
寒月や水鳥潜る池の浪　龍山
雲よりも先へ降出すあられ哉　光林
宿取て出て見る山のしぐれかな　錦鶴
小鳥網はつて人なき枯野哉　雲所原　百白
掃音に影日南ある落葉哉　下阿宮　子孝
よい日和ありて気のせく師走哉　秋玉
瀬の音の松にこたえて時雨けり　花光
船からもけぶり立るや年のくれ　松齢
しぐるゝや同じ湖にも真帆片帆　梅且

」（「十三」ウ）

」（「十四」オ）

」（「十四」ウ）

鴉にも名残のあるや年の暮　休遊
暮かけて明るくなりしかれ野哉　暁花
月さして柊光る霜夜かな　梅園
茶の花の日南や蜂の立さはぐ　虎逸
ひとりごというて庭掃落葉哉　梅牛
山門の上に澄けり冬の月　伯松崎　米山
何もなき野に凩の谺かな　米子　此鶴
大空の一日青しかへり花　、　夕美
大寺や冬の月洩る台所　、　理玉
川越て柳に晴るしぐれかな　栗嶋　効我
山風の吹しりぞけるしぐれ哉　石波根　桃牛
船からも上つて来り年の市　タルミ　春眺
宿借の草臥顔や夜の雪　、　一居
爐に向て聞やしぐるゝ垣の音　ハツミ　思文
水仙の葉にも見ゆるや日和ぐせ　ユノツ　竹浦
ちる木の葉旅は物うき物ながら　アトイチ
すてた世をのぞみありげに紙子哉　ハマタ　尚徳
打た火の芝にこぼるゝ小はる哉　東谷
水仙やまれな日和をまつて咲　国井
雪積て茶のある園の立木哉　石茶
褶負うて戻りに暮る山路哉　虎哺
ひとつ立は皆立鴛のむつみ哉　桐陰
松ほめる声や小はるの塀の外　宗寿
くらがりに立浪白き寒かな　一痴
はつ雪や払うて戻る袖のちり　トリコエ　鶯和
　　鵞川

」（「十五」オ）

」（「十五」ウ）

」（「十六」オ）

鶏はうたひながらのしぐれ哉　播　魚崎　尺西
まだ秋を残す流れや枯尾花　備前建部　几麗
羽叩のうつる障子や霜の鶏　備後尾道　梅臣
　一畑寺にて
朝ばれや梢の雪も眼の薬　一枝　」（「十六」ウ）

蝶々の影移りけり濁り水　一枝
　風ありながらあたゝかな雲　鶯和
朝葱の鱠する日の近よりて　枝
　いつもりゝしき馬士の又来る　和
照月にぬれたる簑をうれしがり　枝
　遠ききぬたにゆれる里の灯　和
秋寒くながれ横たふ塔の脇　枝　」（「十七」オ）
　画会崩れののぞく肴店　和
仇らしき友仙染に反古染　枝
　何思ふやら爪の垢ほる　和
日車はいつしか西に向かへて　枝
　まゝ風おこる雨はれの月　和
深更餅来る剋限とはなしあひ　枝
　又入舟がありとしらせる　和
杭の鳶ながるる苞に眼をくばり　枝　」（「十七」ウ）
　ちゝぶ参りの笠かすみゆく　和
庵のはな簟笥の鍵をぐはらつかせ　枝
　囲爐裏塞てあくる天窓　和

炭竈の雪より白き煙かな　一枝
　一むれ高う通る鈴鴨　前路
綺羅豆汁加番戻りにこのまれて　枝
　翌の手筈もいひおくりけり　路　」（「十八」オ）
文月の閏に月の待ながら　枝
　はたおりつける露草の中　路
晩稲田に吹ちらしたる角大師　枝
　かけ連なしの武士の往来　路
茶を汲も昔をしのぶ小町茶屋　枝
　思やつれてかはるうた声　路
豆仮名で書た手紙のわかりかね　枝
　遣水丈はいつもながるる　路　」（「十八」ウ）
風蘭のかをりをふくむ宵の月　枝
　しのだ参りの支度とゝのふ　路
大鋸屑のほく〳〵とする横小路　枝
　鍋に雀ののぞく井の元　路
猿引の家別めぐりも花の時　枝
　雨に暖みをもちし春先　路
丸五日ふるまひつゞく雛祭　仝
　荷の工合かは車うごかぬ　枝　」（「十九」オ）
朱雀野へ出れば聳る東山　路
　干魚焦る匂ひいぶせき　枝
おゆる身は火燵の番が仕事なり　路
　冬の椿を活し卓下　枝
さつぱりと舟もかよはぬ風がふき　路

うらみの念を祈る短刀　枝
青楼へのぼりつめるもはかりごと　路
われからと啼むしもわれから　枝
ともし火もなしに物読明り　路
いやらしきほど赤き鶏頭　枝
灘酒は銚子も入らぬ茶碗飲　路
肥てはあれど弱きすね押　枝
どもこかも巡見触の道普請　路
靄の中から雉子の羽だゝき　枝
かくれ家もうちすてがたき花盛　路
摘頃過てたわむ蒜　枝

（「十九」ウ）

（「廿」オ）

早泊りして悠にきくきぬたかな　一枝
円座並ぶる板敷の月　千海
野の色の移るか鮒も色かへて　枝
村の栄曜をしめす長役　海
餺松定例らしく置て行　枝
雪の礫に犬は吠やむ　海
名にたてるよりは寂しき四十九駅　枝
渋茶の垢のぬけぬ土焼　海
阿字観に入た積りで酔たふれ　枝
般若だちとて禿おだてる　海
鉢山を勝手な所へ持はこび　枝
火に来た虫をつまむ黄昏　海
月の蝕終れば畳む晒布　枝

（「廿」ウ）

叩けばはづす背戸の鍔　海
菓を喰うてみたがる病上　枝
地震の噂の響く北筋　海
遅いのもあらで訪るゝ庵の花　枝
弥掃させる竹の秋園　海
乾沼の中にも蛙ころ〳〵と　仝
古き鏃を祀る若宮　枝
伯楽は浅黄小紋の一張羅　海
仏頂面に見ゆる底ゑみ　枝
因果きく日からとりおく狸罠　海
捨がらなりに燃る榾の火　枝
延べ膏に風ひかせじと部屋に張　海
産の恩より厚き鉄漿親　枝
緋鹿子は夜のみ結ぶかゝへ帯　海
買うて逃したむしの音をまつ　枝
月前になれは平家をくりかへし　海
痩地ながらもさける水引　枝
井戸ふたつあれどどちらも鉄気也　海
練塀越に焦す鰶魚　枝
不断着にすれば秩父の針目欠　海
遣ひてのなき飯田元結　枝
用兼て行とはいへぬ花空過　海
子づれ雀の朝機嫌なく　枝
朝霜や一輪つよき野なでしこ　対美

（「廿一」オ）

（「廿一」ウ）

（「廿二」オ）

涸し小川をあさる鶺鴒　一枝　」（「廿二」ウ）
ちとの間も手の放されぬ藁焚て　美
　棧子さすほど瓦つみけり　枝
暮ぬうち出て有月に気も付ず　美
　今からたうべ貰ふ鼠茸　枝
地蔵会が此街隈の大まつり　美
　二葉葵はしほらしき紋　枝
仲人の嘘は兀ても憎からず　美
　莫の酔をさます風筋　枝　」（「廿三」オ）
狆ころの狂ひ労れる長廊下　美
　如面露の水の裾にとばしる　枝
蒸暑い空に薄まり昼の月　美
　けふの馳走は茄子の鳴焼　枝
済口になつた喧嘩の根葉もなし　美
　醍醐の花に多き駕籠乗　枝
どの店も先へ売切るさくら飴　美
　午剋から後はかすむ水音　枝　」（「廿三」ウ）

春の夜に似たぬくみなり雨の月　一枝
　まだき莟もかをる菊畑　花井
鮭ひとつきるに大勢集りて　枝
　あつ風呂好の下たかせけり　井
杉なりに積ばりゝしき炭俵　枝
　紺に染たる頭巾眼にたつ　井
所さすほどに叱を聞覚へ　枝　」（「廿四」オ）
化はひする身も最早三十　井
紙罰もあたりさうなる紙遣ひ　枝
　嵐の末のこもるしの竹　井
着がへなきひとへ羽織の洗張　枝
　粽くばりに頼むよその子　井
宵月に何立さわぐむら鴉　枝
　取込稲にふさぐ軒下　井
有合の木の子で済す永平忌　枝　」（「廿四」ウ）
　切口上で不沙汰断る　井
咲かゝる花に背峡の日和雲　枝
　夏の近さにかはる水音　井

　簸川眺望
秋風や水すれ〳〵に鷺の行　一枝
　腰みの振ふ霧はれの月　楓月
四阿屋の葺替芒穂に出て　汀月　」（「廿五」オ）
　村の歩行に汲茶のまする　枝
年よりも古う見らるゝ丸頭巾　楓
　薪たくはへて春を待けり　汀
不自由な浮世小路に住なれて　枝
　仕事のやうに思ふ身仕舞　楓
補陀落に涙ぐみたる眼をこすり　汀
　猫のやけどの薬たづぬる　枝
満月に団扇かざしてさし向ひ　汀　」（「廿五」ウ）
　風の薫りにむせる嚏　楓

大八の油ぬりてもきしるなり　枝
　枳穀の垣につゞく出格子　楓
相役に笑はれて居る胼胝　汀
　すべりをぬらす蛤の汐　枝
柄杓井の中にちり込庭の花　楓
　空あた、かにほこりたち舞う　汀
　　」（「廿六」オ）

まき水によき根じまりや門の松　イタミ　椅陰
明る戸に影さし込や月の梅　、　龍女
はるかぜやはてなき海に旭の匂ひ　、　古樵
　卯月朔日盤峰に登りて
卯の花や眼をとゞむれば雪の嶺　雲水　静和
いねつむや額にさはる海老の髭　、　桃乙
梅ひとつ袖のおもりや単もの　、　曲川
いつ月のはなれて露の明り哉　伯　小鹿谷　風雅
　　」（「廿六」ウ）

山買うて我鶯にしたりけり　神蔵　米原
止さうに見へて寐られず月の雨　山口　春人
餌を遣れば魚の浮けり杜若　久見　渓風
山ひとつ暮てこしけり春の月　、　梅所
壁ごしを何所から来しぞ三十三才　、　卜子
菜の花や蝶の舞込駕の中　、　五光
雨の日は日の暮早し庵の秋　、　朶柳
鐘撞てから暮かねる紅葉哉　倉吉　竹雨
　　」（「廿七」オ）

覗かる、海士の住居や夏の月　雲　クノ　花暁
しのび聞して鶯に見られけり　八代　橋宣

かすむ日や莚帆おろす高瀬舟　サシロ　岐山
眠り居る猫や小はるの藁尻　木次　秀山
鶯の声広椽にひゞきけり　虎逸
飼鳥に野心つくや花の雲　梅園
膳居た間〳〵の火鉢哉　上ノ郷　西女
近道にひまの入たるすだれ哉　大社　鶴寿女
　　」（「廿七」ウ）

青梅に物いふ留主の小家かな　、　鶴栄女
松笠の落て氷をはしりけり　、　久栄女
せり合ふてうつや日暮の畑と畑　、　美津女
むし啼くや送りて戻る女客　、　久つる女
梅さくや夜な〳〵くもる水の筋　、　帰一
眼のさめてことしへのばす手足哉　、　梅左
身は君に家は凩にまかせけり　、　星山
寒月に見へほそりけり堅田の灯　十年畑　花実
　　」（「廿八」オ）

さぐり来て手柄咄しや夜の梅　亀長
啼さうに月を見上る鹿子哉　母里　可夕
使ひ子につかひの行や風巾　伯　法勝寺　百嶽
御降や向直りたる池の鴨　谷川　春保
峯は夜の明たあらしや時鳥　、　保月
来る人を見勝手に居るこたつ哉　備後上下　露秋
降あまるやうでつもらず浦の雪　、　風外
ひとしきり遠く眼のゆく桜哉　、　露白
新しき手舟の木香や初霞　田房　宜白
　　」（「廿八」ウ）

塔ひとつ高く夜明て鴨の声　、　芾棠
見た顔で思ひ出されぬ礼者哉　、　雨川

この頃の夜旅も嬉し天の川　庄原　碓山
煤払や馴れぬ手わざもいさましき　〃　うた女
庭掃て菊あたらしきあした哉　播　池田　吾雲
よく見ればぬれても居らぬ若葉哉　大塩　梅路
こぼるゝもたわむも萩の風情哉　〃　有声
一本の朝顔垣にあまりけり　〃　鳩居
百合の花咲たばかりや川むかひ　〃　清水
芒野や見ゆる渡しを幾曲り　〃　南渓
うち水も人手にかけず苔の庭　〃　清風
いな妻やがぶりと沈むかいつぶり　〃　桃岸
名月や今宵の星は気もつかず　相工　湖雲
　黄昏頃より四条大路に出て
明月の真下にくろし東山　一枝
神垣や蒔たほどふる初あられ　大坂　桃年
　舞子浜にて
こがらしや松のあまりを海の上　〃　虎尺
美しう小風の添や草紅葉　〃　炉翠
しぐるゝや七事に尻を居る客　〃　周馬
ものわすれしたやかに降霰哉　〃　蕉林
朝虹は日和の相やさくら狩　〃　閑遊
気のはらぬ俄茶のゆや初時雨　〃　旭石
此影を惜しむばかりや冬の月　〃　井資
葉苅してよい影持や月の松　〃　東暁
点撫る蛙おかしや樹の雫　〃　知風
子に福な家や弾初うたひぞめ　〃　一瑳

若草やまだ一雨も受ぬ艶　〃　梅丸
初夢やいわぬ先から造る笑ミ　〃　后桃
聞すます声も栞りやざこ寐の夜　〃　松子
菊莨のみけぶらせて冬ごもり　〃　芦丸
国境あらわに見えるかれの哉　和　タカトリ　八千男
眠くなる眼にそばへくる小てふ哉　〃　子剛
水鳥の丘に様子や降小雨　〃　富洲
雲かけて帆のはしり行時雨哉　〃　月江
座取して草に待るゝ雪解かな　豊　ツルサキ　呉山
手作りは花さへ見ぬにはつ茄子　〃　日出　蘇園
眠る間も羽に風受て秋のてふ　〃　題成　淡宝
掃て居る眼先も絶ずちる木の葉　肖年
雪になる夜の趣や酒の味　鼎左
　浪花にて
心なく人踏行や橋の雪　一枝
たま〳〵によき月夜也冬の梅　〃

戊午のとし

蕉門御摺物所
御注文次第出来差上可申候
京四條寺町東へ入御旅町
湖雲堂近江屋利助

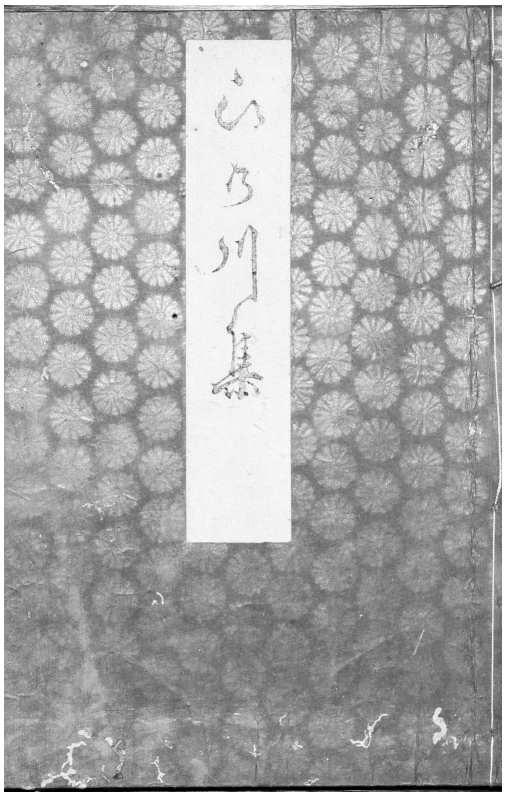
〈付記〉

本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。また、難読箇所に関して、稲葉有祐氏、真島望氏から御教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

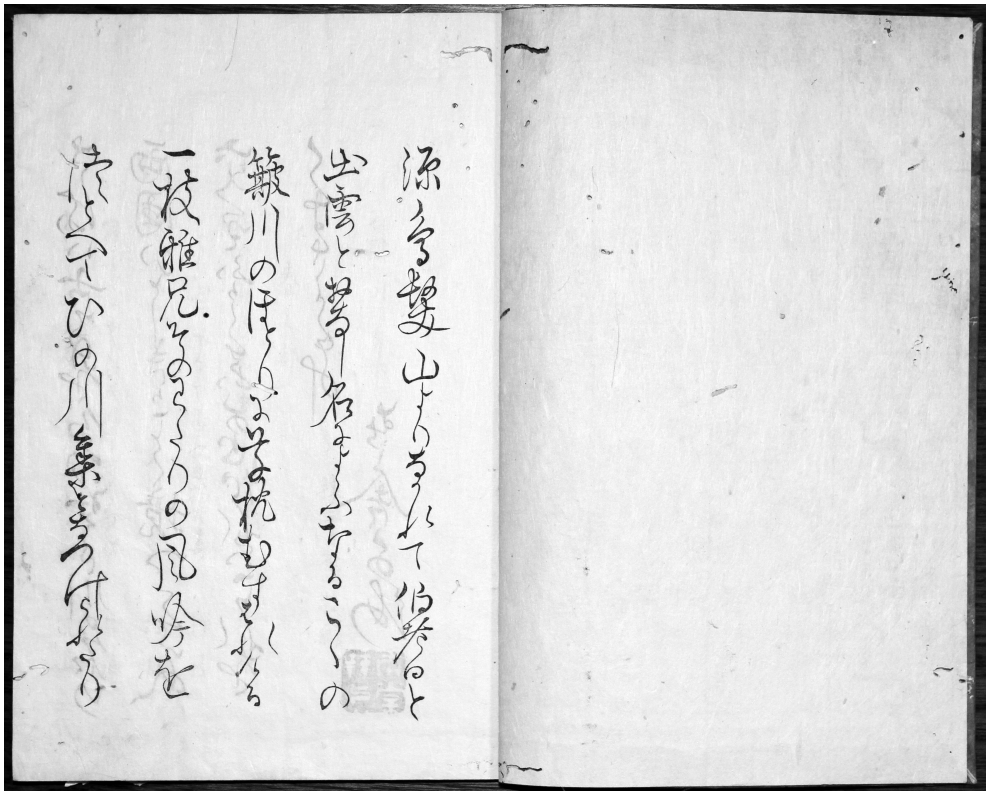
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二一年度、代表・中則雄）、科学研究費補助金（基盤研究（C））「化政期俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号 18K00296 代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

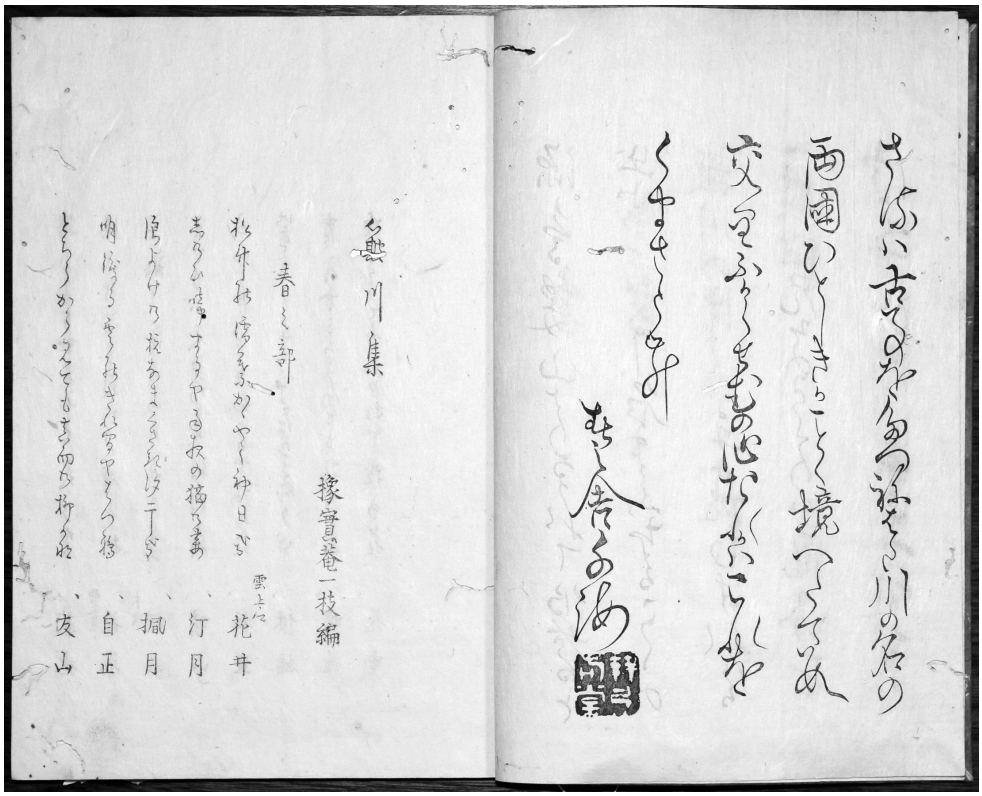
1. 表紙



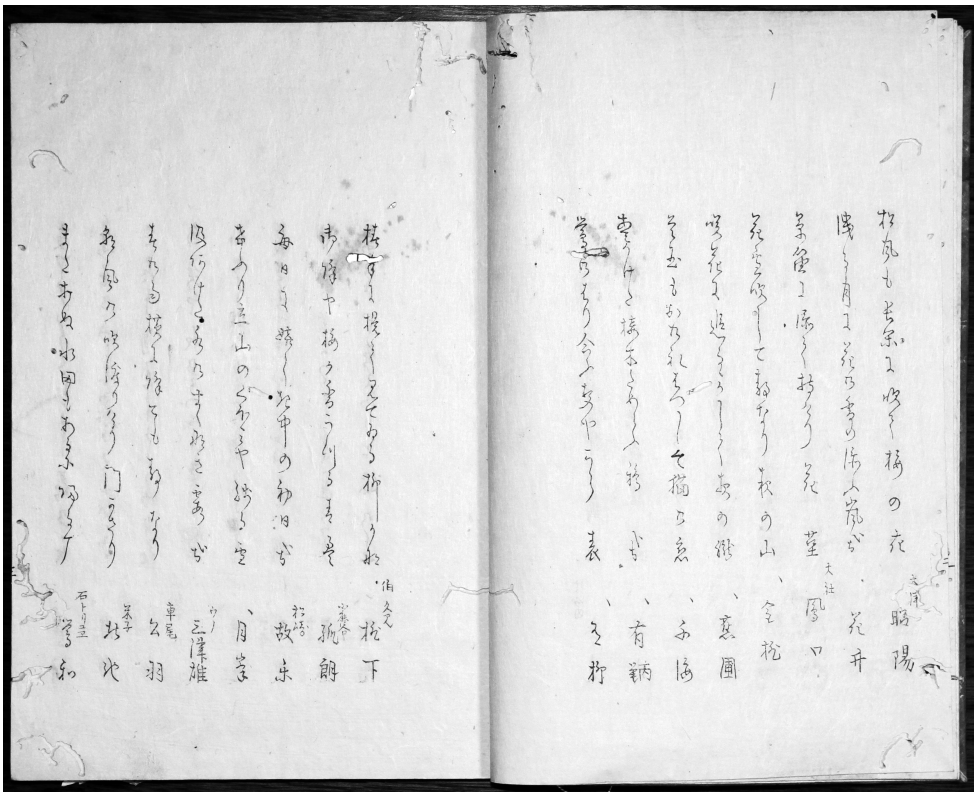
2. 表紙見返し・春之舎千海序冒頭（表紙見返し・序オ）



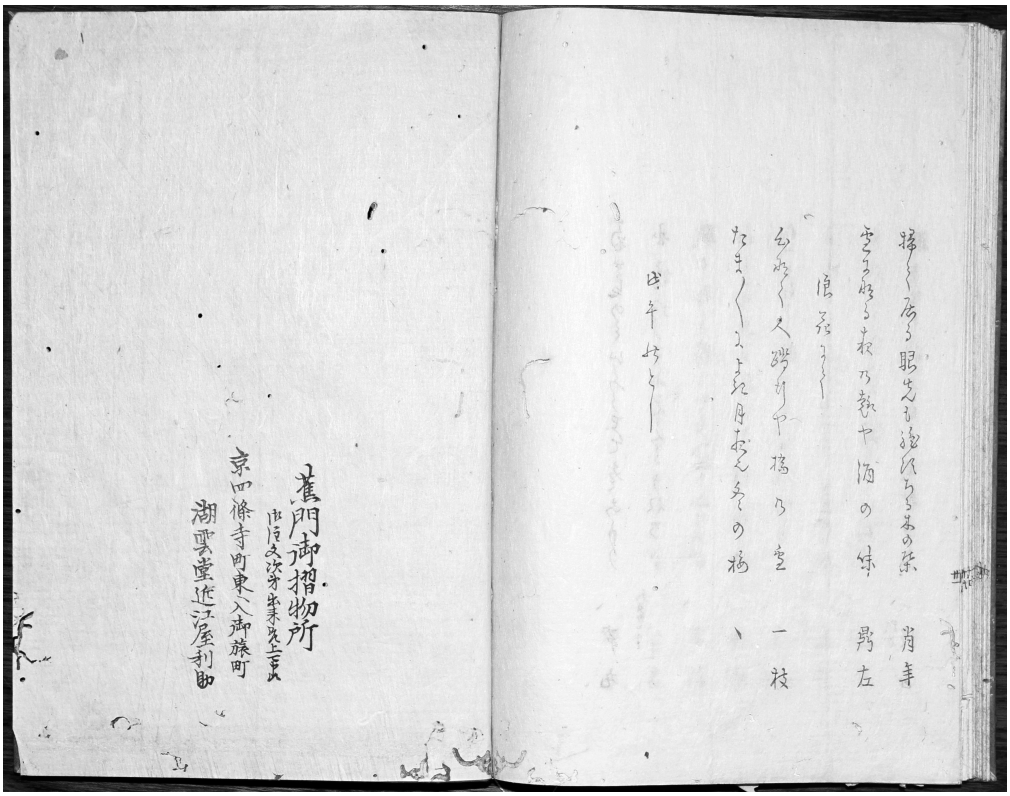
3. 春之舍千海序末尾・本文巻頭（序ウ・「一」オ）



4. 本文（「二」ウ・「三」オ）



5. 本文巻末・刊記（「卅一」ウ・裏表紙見返し）



Tochinomian Isshi ed.,“Hinokawa-shu” : reprint and introduction
—A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (16)—

ITO Yoshitaka
(Rissho University)

〔Abstract〕

“Hinokawa-shu” owned by Tezen Family Archives is edited by Tochinomian Isshi. Isshi is presumed to had been a disciple of Hassen-bo, a haikai poet in Osaka. Harunoya Senkai, who writes the introduction, is a very important haikai poet in Izumo area.

Keywords: Haikai, Tochinomian Isshi, Harunoya Senkai, Omiya Risuke,Tezen Museum